

小栗虫太郎関係資料紹介（一）

——「菊芋」関係草稿（一）、「海峡天地会」草稿

西 井 浜 田 雄 介 鈴木 優 作
田 川 理 大 鷹 涼 子
恭 子 八 木 橋 悠 太

序

浜 田 雄 介

経緯と謝辞

成蹊大学図書館は、二〇一六年夏に古書展に出品された小栗虫太郎の草稿類を含む関係資料を購入した。このことはご遺族の皆様にも喜んでいただき、同年暮れには本学訪問の上、それぞれのもとに遣されていた資料の寄贈を賜った。その後も様々の情報やご協力を頂戴している。二〇一七年秋には図書館で「小栗虫太郎（^大）PANDEMONIUM（^英）の扉を開く」と題した展示を行い、また浜田の関わる研究同人誌『新青年』趣味^大が小栗虫太郎特集を組んで、収蔵資料の一部の翻刻を行った。

図書館ではその後も関係資料を収集するかたわら、草稿類の補修とデジタル撮影を順次行った。本来であれば、ある程度整理した上で撮影を行うのが定法であろうが、紙の劣化が激しく、整理のために原稿を広げれば、それだけで用紙の端が欠けるという状態であっ

たため、補修と撮影を優先することとしたのである。

この資料の扱いを含めた研究に対し、二〇一九年度より四年間、科研費「近代日本探偵小説研究の基盤整備」（19HO12325001）の助成を受けられることになり、博士後期課程の大学院生及び専門知識を持つ学外の研究者にも協力を仰ぎデジタル画像をもとにした解説を始めた。ある程度ノウハウが固まったところで、二二年度には博士前期課程の院生、二二年度には大学院修士生や学生の有志にも作業に加わってもらった。現時点までの協力者名を挙げると、五十音順に井川理・乾英治郎・大鷹涼子・沢田安史・鈴木優作・津島日和・西田恭子・村木碧唯・本田逸朗・八木橋悠太・雷博強の諸氏である。草稿類の第一次の解説がほぼ完了に近づいたところで、最初期から中心的に関わっていた鈴木優作が中心となつて資料の概略を発表作品に紐付け整理したリストを作成した。二二年度には科研費「近代日本探偵小説の資料保存とアーカイブ・ネットワークに向けた基礎的研究」（23HO06070001）の助成を受けられることになり、鈴木

のリストに基づいて作品のまとめりに再検討し、『成蹊國文』に向けた原稿作りを始めた。

図書館の所蔵する関係資料は草稿類の他にも校正刷りや掲載誌紙切り抜き、取材ノートなど多岐にわたるが、まずは草稿類の紹介を開始する。今回は、創作関係として「海峽天地会」草稿、非創作関係として「菊芋」関係草稿を翻刻した。

以上の簡単な記載にも明らかのように、図書館の理解と対応、ご遺族の理解と協力、科研費の助成、研究協力者の誠実な作業がなければ本研究は成り立たなかった。心からの謝辞を記したい。

原則と責任

(1) 字体について

新字体、新仮名遣いへの統一は行わず、原則的には原文に従った。異体字のうち、例えば教、質、重、場、浅、彗、奥、东、勢などは特に断りなく本文中に組み込んだが、容易に利用できる文字フォントがない場合は新字体を用い、解説にその旨を記した。

(2) 使用記号について

推測される文字は「 」で記し、解説不能な文字は□で示した。挿入は《 》で示した。

削除は取り消し線(取り消し線)を用いた。複数行を枠で囲って塗りつぶすなど、ブロックとしての削除は網掛け(網掛け)を用いた。最初の削除箇所を含めてより広く削除した場合など、取り消し線と網掛けは併用したが、取り消し線を重ねるなどの煩瑣は避けた。

紙幅および挿入の際の余白の都合による改行は、/を挟んで改行せず続けた。

(3) 注記について

本文末尾に、用紙、筆具、特記事項、画像番号、第一次整理番号を記した。

画像番号とは図書館所蔵資料のデジタル画像の番号である。第一次整理番号とはデジタル化以前の整理番号だが、二〇二三年十二月現在、原資料はこの整理番号の袋に保管されている。

(4) 責任体制について

紹介する資料の各まとめりに担当者(筆頭著者)と共著者を決めた。担当者は共著者とともに複数回のチェックと検討をした上で本文を確定し、解説を執筆する。共著者の役割は個別のケースで異なるが、原則として各まとめりに眼を通し、本文確定のための検討を行う。

小栗虫太郎「菊芋」関係草稿翻刻

浜田雄介（担当者）

井川理 大鷹涼子 鈴木優作 八木橋悠太（共著者・五十音順）

「菊芋」関係の草稿類の画像は二〇点確認できているが、ここではそのうち英文タイプ原稿を反古紙としてその裏面を用いたもの九点を翻刻した。英文タイプ原稿はインド独立運動の展開について記されたもので、「会議派殿下」などの取材資料と思われるが詳細は調査中である。【一】から【八】まではタイプ用紙の裏面を横長に用いて縦書きしたもので、【九】は【六】の裏面すなわち表の英文が記されている面を横にして英文の行間に縦書きしたメモである。

【一】

設立趣意書

《×》 兼正□□□設立に関する趣意を左に□□述す。この重大危局の秋に際し、《兼正》《茲に》取えてわが《イヌリン研究所》を《を》設立ゆ《せんとする》目的は、長野県藩□□に最も《豊富な菊芋より果糖を製造す》《し》／《もはあり、車水》《且》《又》その滓り粕より製パンを本↓（小麦粉《及びパン酵母》不用、《簡》單に且、化學的に《麩質並びに》糖／性を附与する新方法）／をなす□□にある《を》□□□□□食糧難□□車水なる□□を打開せん

とする□□にあり。

主要作物を混ぜざるが代用食品製造をもつて

①

要するに、《これは》果糖は□□空中勤務者並びに重工業従業員用疲労《回復》剤として、／粕パンは、《本邦》唯一の主要食品を混ぜざる主食用パンとして、《提煉、以つて》軍□《需》並びに重工業能／率増進《用》、並びに、刻下の癌たる食糧難を打開せんとするにあり。

《×》 本社員小栗栄次郎は、つとに《科學的》探偵小説《作》家《筆名小栗虫太郎》として□□名《声》あり、／昭和十六年十一月《指名》徵用□□をうけ、サイマイ作戦に参加し、以後一年間、陸軍報道／班員として《馬來》クアラ・ラムプールに駐在す。その期間内□□《南方各地に》マキ菊芋に／注目し、□□□□《公務の》余暇を利用しては、クアラ・ラムプール□□□□《同地》農事試験場に於いて菊芋栽培並びに／果糖製造を研究す。これ□□菊芋□□《が》含有□□《す》る《、》炭□□《含水炭素》「イヌリン」を□□加／水分解して果糖となし、これを以つて《、》航空燃料用《用アンチノック剤□□《本》《た》るイソ／ブチレン／の原料なる《、》《ブタノール製造に要する》／蔗糖に代へんとせり。然し本が《ながら》□□本邦に於いて《は》《、》未だ《かかる大工業をなすほどの》菊芋は《の》量□□がなく、ここに□□□□□／《目的を転じ》《目的》的を□□《変え、》疲労回復剤となす《製造方》□□《製造》《方面》《に》□□□□《目的を転じ》たのである。

□《滋養價》大なる空中勤務者用食品製／造可能なり。

②

皮肉なことに、よく晴れたうつくしい朝だった。火がよびだし
 風で内港は波たたく、いちめんの重油／の切れ目切れ目に蠶のやう
 な水煙がおどつてゐる。ガヴァナース島の西側で、ユー・エス航路
 の／豪華船ウオツシントン号がさかんに燃えてゐるあたりから、ゆ
 本本の混乱□の十齣を物語るやゆ本

本ほ他は □《一》、果糖液の使《用》途

十《(a)》、ブタノール製造《及びその原料として》
 《×》この果糖液にブチール菌を作用せしめ《、醸造過《工》程を
 経るときにはブタノールとなる。／本邦にてはブタノール《を原料
 として、それ》より「航空用燃料用高オクタシオン」を原料とし
 「を標製造しつ／あり。しかもそのブタノールを造る原料とし
 て、砂糖三十万俵のほか、甘薯、馬鈴薯／等、国民必需の食糧《の
 十半》より原料を《の一半》をそれに当てて居る現状なれば、もし
 □□《この》《「菊芋による》「果糖《液》／製造□□が企業化され
 たる暁には船腹を節し得ることは勿論、□□□□の《目下焦眉の急ゆ
 たる》食糧問題／の□□《端》を《も》解決し得ること明かなり。
 けだしこの果糖工業たるや、軍需《化学》工業に於いて《中》残さ
 れ居る唯一の処女地といふべく、小また衛人も製造不可能な《そ
 れが》今回《はじめて》□□□□□□《はじめて当／方の手にて》
 製法完／成し、この《未墾の》重□要部門に先鞭し得る地位を□作

り得たるものなり。本年三月一杯まで／に農家と契約を完了し、《大
 増産後の》長野全県の菊芋を獲得せば《し遊休酒造工場を活用せば》、
 おそらく軍所要のブタノール全量□提供□可能なり。

十《(b)》、《航空糧食酒及び》果実酒製造

《×》酒造用米割当大激減により、政府にては果実酒を奨励しつ／
 あり。この果／糖液よりは、極めて良好なるアルコールが得られ、
 □□□□《林檎酒《程度》のよ／も果実酒□《よ》りもさらに／
 一歩進みたる》、《極めて酒精分強き／ブランド類の》製造可能な
 り。これは現在、空中勤務者が採る強葡／葡萄酒、強ブレンダー等
 と同價□《、》或ひはそ□れ／以上のもの現在軍にて採用しつ／
 ある空中勤務者用の「航空酒」は、強葡萄酒、強ブ

*英文タイプ原稿裏面に黒鉛筆で記載。縦幅二〇五ミリ。②《×》
 および一部の挿入指示には赤鉛筆使用。二行目「果糖液製造に」の、
 文中における位置は存疑。紙面左上に割算の267/1570らしきメモ
 の消し跡がある。画像番号 S2016102985_8_018 第一次整理番号
 033

【四】

③
 ランデーの二種なれど、果糖液を発酵せしむるときは極めて特種な
 ものを得られる見込／なり。《×》《糖》果糖は《、いはゆる單糖類

【五】

④

《×》製造の時期は、《根芋のイヌリン含有量もつとも豊富なる冬期間、即ち、》十二、一、二、三の四《ケ》月《間》に限れども、しかしこれは、沈澱法により《寒気により》イヌリンを沈澱させし貯蔵せば、その他の期間春、夏期にても製造し得るを得。

また、冬を《が》過ぎて雪が溶けし容易に□□《芋が》掘りだせるやうになれば、《自然》芋價も下りし／その後ること本札は《ゆえ》パン種《その後の芋を原料とする、製パン原料》製粉にも充分採算をがとれる次／才なり。

《＊》以上のごとく、これは□□日本最初のもの。

四、工場設備、

《×》現在はそのごとく、ほんの研究的設備にても、《充分》一日一石の製造機能率あり。《これを》《稍》□□《は、工場らしき設備をなし》能率的に使用せば、十冊《悠に》十石は可、なほ《これに、》《稍》工場らしき体裁を施《設備を》し《て》能率的に使用せば、一日悠に十石は可。《なほ》／北信中野平附近に多き遊休酒造工場を利用せば、年産約三万石は期／待しても誤りなし。その他、《長野県下の》菊芋の多き土地、上田附近にも工場設置の望／みあり《余地多し》。所要機／具類は、わずかに、釜類、□絞り器《のみ》（これは、木工土地の大作に作らせあても出来る）。アルミ／φ二ユームの鍋、あるひは高压釜あれば尚可なれ

ども……。

《一行アケル》 九、収釜、

《×》 値段は、九、収釜

値段は《×》以上のごとく、《現在》この果糖工業は唯一の処女地に先鞭し得る新興軍／需工業たるを得るのみならず、国益、民益ともに、戦時下に於ける《大收穫たるを疑はず》／□□□□
ゆみならず《□□□》《のみならず》、□□収益に於いても非常なる相当《以上》のものあれば、この際速／急に企業化の要あり《と信ず》。

以上

《一行アケル》

《×》なほ、小生名儀にて見本並びに説明、意見書、陸軍航空本部に提出済。

以上

*英文タイプ原稿裏面に黒鉛筆で記載。縦幅二〇五ミリ。《④》《×》《一行アケル》および一部の挿入指示には赤鉛筆使用。画像番号 S2016102985_8_016 第一次整理番号 032

【六】

①

少年放《棄》され□たる菊□芋□□□／菊芋中の□□□□
菊芋□の主な □□□□□□□□《果糖》製□るこは、從來《本部に》て理／研、森永、あるひは陸軍航空□□□□企てたれど□

①、《×》および一部の挿入指示に赤鉛筆使用。冒頭は青鉛筆で削られた数行の行間に新しい文章が書かれている。青鉛筆は他に《高級アルコール》《A》の挿入指示。④《×》《一行アケル》および一部の挿入指示には赤鉛筆使用。画像番号 S2016102965_8_100 第一次整理番号 095

〔七〕

②

三、《現在》長野県下に於ける《菊芋産出量》

菊芋はわ□《×》わが国に於いて《ける菊芋の栽培は》長野県《が主位》、北海道が二位、他《地方》は遙かに下りほとんど《問題とならず》。さて、ここに長野県下のみ就いて云ふは去々《ふに》、大体全県下獲得《入手》可《能量約四百五十万貫にして、そのうち、《北信》長野電鉄沿線、佐伯南北佐久郡一带、塩尻在桔梗ヶ原を中心とする三ヶ所が三大産地なり。それなく、五十万貫程度産出し、本年度に於いていま直ちにと云ふて《も》その量の入手可能なり。その五十万貫合／計百五十《万》貫をもつて、原液《見本の□《液》の濃度の約二分の一、即ち見本のもの、□原液を半分に濃縮したるものである。》約一万二千石、□概算にて四石を一／トンとみれば《》約三千トンの果糖液を製造し得。《また》それよりアルコール製造に《れを原料としてゆ》、ほゞ／同容積として《》三千トンのアルコール製造可能なり。

四、来年度《増産》計画

《×》川原、丘陵地等□、他の作物の栽培を妨げざる荒地、共有地への栽培はあらゆる方／面が賛成にて、《ことに》北信にては、《各町村とも無償提供を申し出、《その労力は》》學徒、勤労報国隊のみにて《あ》《しかも》大／増産を期待し得るなり。□□ゆ《他産地の》《なほ他ゆ／産地の》状況《動きを云へ》ば、当方より佐久地方に□働きかけ快諾を得、塩尻地方は《↓田下》《、目下》談合中なゆ《ゆゆ》《ゆゆ》《といふの》が現状である。いづれにしても、来年度はもし企業化さへ成れば、悠に五千万貫ゆは収穫出来、それを以つて、戦力と《に加へるところ》の《一》新大資源となし、且又、アルコール製造に要する甘藷、馬蹄《鈴》薯の全量を国民食糧に振り向けるを得ば、目下さながら断崖上《に立つ思ふ》《ひ》の観ある食糧問題の一半を《も悠に》解決し得るものと思惟《考》す。／要するに菊芋こそは、従来はほとんど《利用價值なく、》捨てゆれてゆた《顧□□られざりし》ものなればなり。

五、製造設備

《×》果糖液製造に要する機具《類》は、じつに簡單なるものにて足り、耐酸釜《普通の木《鉄》釜》にても酸使用量《ごく》僅少なれば、可成り長期間は保つ見込、《及び》圧搾器以外《に》は《一物《を》も要せず》／棄せず、悉く《しかも》それは《遊休酒造工場を利用すれば購入新製せずと足る。》目下長野《□》県に在る《下にては》、整備による遊休酒造工場の数可成りなものにして、

《いづれも利用を待ち、從／つて》工場／設備の新設、機具類の新購入などは絶対不《必》要／なり。即ち、製造命令下れば明し^カも、粗製アルコホル本／札^下即ち、生産は明日からにても可能なのである。

* 英文タイプ原稿裏面に黒鉛筆で記載。縦幅二〇五ミリ。

《②》《×》および一部の挿入指示には赤鉛筆使用。画像番号 S2016102985_6_053 第一次整理番号 255

【八】

《④③》六、《なぜ》本年度生産を急速に実施しなければならぬか

《×》菊芋なる植物は、十一月中旬に於て《頃》《まつたく》葉幹枯れ、根芋成熟す。それより、四月中《下》旬／頃までの発芽期までがもつともイヌリン含有量豊富なる時期にして《発芽期となれば芋中イヌリンほとんど消失す》、即ち、生／芋をもつて製造し得る時期は冬期間のみなり。然しそれは、幾今頃より発芽／期までにかけて芋を掘り、それを《蕪切断し》乾燥し蚕棚を利用して貯[□]蔵せば、悠に、春、／夏、秋の三期も変らず製造し得るものにして《それを思へば》、今より約四十日間／《がもつと大切なる時期にして、その間[□]》中に実着手せざれば本年度の大量生産は全く不可能《見込みなきもの》となるのである。

《×》なほ菊芋は、約八十パーセントが水分なれば蒸腐《發酵》し易き傾向充分にあり、冬期／間にても、約二週間を要する東京への輸送は困難なり《泥と共に凍結したるものを俵詰め／にすれば、二三日にて《湿気のため》猛烈な水蒸／氣を發す》。また乾燥したるものに／ても、五月以降九月頃までの《高温高濕の》氣候にては変質の懼れ充分にあり、ために、蚕棚／[□]を用ひ風通しをよく[□]する必要生ず《るなり》。

七、副産物に就いて

《×》芋を圧碎压榨し、イヌリンを絞り取りたる後の残滓は、ほとんど《が》蛋白質[□]／なれば、それを馬蹄《鈴》薯より澱粉を採りたるあとの粕と混捏して焼けば餅／状の食品となる。目下、工場給食が《次第に》本由由に《窮屈に》なりつつある折柄、産業戰士／への好個の給食品[□]贈り物たるを得疑はず。しかも大量に出／來^{□□□□□□}大量に出來[□]《それ

《×》見本は、その残滓を少量の小麥粉と共に焼きたるものなり。

《十術イキ》

八、他の利用方途

《×》[□]注射用果糖《液》製造原料、《その》《熱量、》營養價值《ともに》大なるがため、航空食用營養嗜好品、酒類製造等。

《一行アキ》

《×》以上の如く、《航空》戦力に資する新資源として、また食糧問

題解決の緊急／策の一つとして、速急果糖工業企業化に就いて御裁決を仰ぎたく、ここに□《こく》概要ながら□意見《説明》《意見》書を呈出する次第もつて具陳《呈出した》《す》る次才である。》

*英文タイプ原稿裏面に黒鉛筆で記載。縦幅二〇五ミリ。《④③》
《×》《一行アキ》および一部の挿入指示には赤鉛筆使用。画像番号
S2016102985_8_010 第一次整理番号 029

【九】

ブタノール、《航空糧食》、營養《劑》的飲料《カルピスを凌駕する》、
糖尿病者、果実酒、一般嗜好品／粕及び菊芋そのものよりのパン種、

一、必要薬品、燃料、

一、改良、

一、《現在の》設備、将来、（無酸法）——アルミニウムの鍋

一、

日本最初の、

収益

国益、

現在残された、唯一の処女地（軍需工業）

*英文タイプ原稿行間に黒鉛筆で記載。縦幅二〇五ミリ。空白部に
計算式（割算）が書かれている。

1,200,000	1,200,000 升
1,250,000	4) 1,200,000
25	40
25	1,250,000,000

画像番号 S2016102985_8_101 第一次整理番号 095

【解説】（浜田雄介）

小栗虫太郎はマレー従軍からの帰国後、「海峡天地会」などの創作やマレー見聞に基づくエッセイを多数発表するが、一方で菊芋をめぐる事業に注力することとなる。ここには成蹊大学図書館が所蔵する小栗虫太郎関係資料のうち、菊芋に関する資料を二回に分けて紹介する。小栗宣治「小伝・小栗虫太郎」（『紅殻駱駝の秘密』一九七〇年、桃源社）によれば「陸軍航空本部に見本並びに説明書、意見書を提出した」とのこと、その実物については確認できていないが、図書館所蔵の資料はその下書き原稿と思われる。まとめて綴じられたりしていたものではないので、原稿の順番などは、本文内容と、用紙の種類などからの推定である。今回紹介する一連の文章は、いずれもインド独立運動の展開について記された英文タイプ原稿の裏に書かれている。

菊芋は一九四四年の日本における希望の食材で、「決戦食に、菊芋」

登場／一度蒔けば無肥料で毎年収獲」(『朝日新聞』一九四四年五月五日朝)などの記事もある。二月に東條内閣の農商務大臣となった内田信也が焦眉の課題として直面したのが食糧問題であったが、右記事によれば内田は五月四日の官邸試食会で菊芋を食し、「官邸の菜園に植ゑるとともに全国にも普及をはかることになり、一躍戦時食として今後登場することになった」という。この時内田の食した菊芋が、小栗とともに企業化をめざす市村貞助の育てたものだったことが、今回紹介の資料にも記されている。

小栗と軍、ひいては国策との関係がどのようなものであったかはおお詳らかでないが、この頃の小栗の様子については前述した小栗宣治の証言が彷彿させる。

信州中野(現在の中野市)に、休業していた製餡工場を借りて、試作に懸命であったわけで、莫大な借金もしていた。月二回の東京との往復や、芋買付に新潟まで出かけた。その仕事の関係から昭和二十年五月に中野へ疎開した。国防色のニツカースボンに紺のジャンパーの父が、大釜の脇から、「もっと薪をくべろ。よし、火をおとせ」と命令しながら、長い柄杓をいれて芋の煮工合を見つめながら掻廻している姿は、いま思い出してもやはり滑稽である。ペンより重い物を持ったことのない男だ。しかし真剣であった。脱色脱臭についての研究はのこされていたが、とにかく出来た。その製品は農業会、地方事務所などを通してポチポチ売って行ったが、闇

米との交換が多かったようであった。味は甘く苦く、時に酸っぱくて——といった何とも変てこなものである。が、あの食糧欠乏の折に家族が飢えから免れたのはその蜜のお陰であつた。この仕事は父が死ぬまで続けられた。

今回の資料には、小栗の菊芋研究が一九四二年のマレー従軍体験に始まること、単に食料増産にとどまらず科学による多面的な応用がめざされていたこと、中野市の菊芋の特徴など、多くのことが記されている。公的機関に提出する書類の下書きである以上、個人的な心情を吐露するような文章ではないが、時代の現実に向きあう行動や思考には、やはり興味の尽きないものがある。

翻刻にあたって、漢字の字体については原文に従って新旧字体の統一などはしなかったが、崩し字や俗字など、今日の活字フォントにおいて再現困難なものは新字体を用いている。画像で例を挙げる

と

𠄎(𠄎) 𠄎(𠄎) 𠄎(𠄎) 𠄎(𠄎) 𠄎(𠄎) 𠄎(𠄎) 𠄎(𠄎)

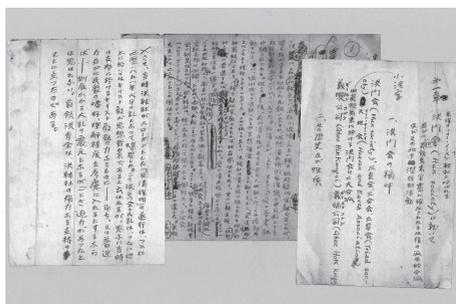
など。多くは同じ崩し方をしているが、「𠄎」の例のように部首の崩し方には幅があり、「𠄎」「𠄎」などは右画像の字体と楷書に近い字体とが混在している。また、「𠄎」「𠄎」などは「𠄎」と同様の崩し方がされている。

小栗虫太郎「海峽天地会」草稿翻刻

鈴木優作（担当者）
井川理 大鷹涼子 西田恭子 浜田雄介 八木橋悠太
（共著者・五十音順）

「海峽天地会」草稿の画像は【一】～【五】の五点。このうち【一】～【三】は、推敲の際に三枚の紙を貼り付けたものである。「用紙①」の右前面に「用紙②」、左前面に「用紙③」が貼られており、【一】はその三枚を広げたもの。【二】は「用紙②」「用紙③」を「用紙①」の中央に向けて折りたたんだもので、【一】で隠されていた「用紙①」の右端左端をそれぞれ「①右」「①左」として翻刻した。【三】はさらに「用紙②」「用紙③」を上に向けて折りたたんだもので、【一】～【二】で隠されていた「用紙①」の右下、左下の部分を。それぞれ「①右下」「①左下」として翻刻した。画像では一つの言葉が二つに分かれたり、挿入の矢印が複数の画像をまたいだりすることがあるが、適宜補った。また、【四】【五】は、反古紙として「成層圈魔城」（『戦時版のみうり』一九四四・四・六～八・三二）の草稿に利用されている。

【二】



「海峽天地会」草稿【一】成蹊大学図書館所蔵

※用紙三枚。「用紙①」の右前面に「用紙②」、左前面に「用紙③」が貼られている。

「用紙②」

東洋のフリー・メーション結社と呼ばれる

□

才一章 洪門會 (Hun society) に就いて

並びに、《旧》英領馬來官憲に弾圧されたる以後の派生的分派／及びその地下的潜行的活動

——即ち、その普^び辺／力並びに民衆の嗜好、理解程度を考慮に入れるとするならば——到底かかる大乱の震元となるがごとき迫力があつたと／は思はれない。首領洪秀全は、洪結社の強力なる支持の本／もとに立つたのである。

*用紙に黒鉛筆で記載。用紙①の縦幅は二〇九ミリ、用紙②③の縦幅は二二八ミリ。《①》「小活字」および一部の挿入指示に赤鉛筆使用。《×》および一部の取り消し線、傍線に青鉛筆使用。画像番号 S2016102985_6_044 第一次整理番号 251

【一】



「海峽天地会」草稿【二】成蹊大学図書館所蔵

※【一】と同一の用紙、三枚。「用紙②」「用紙③」を「用紙①」の中央に向けて折りたたんだ下にある、「用紙①」の右左部分。それぞれ「①右」「①左」とする。

①右

東洋のフリー・メーションと呼ばれる

洪結社 (Hing society) の「史及び性質」に就いて

① 及び海峽 英領馬來 官憲に彈圧されたる 後の派生的分派／並びにその地下潜行的活動

△ 洪結社の稱呼 湊 假

天地 會

天地

× その

× 洪結社 門會

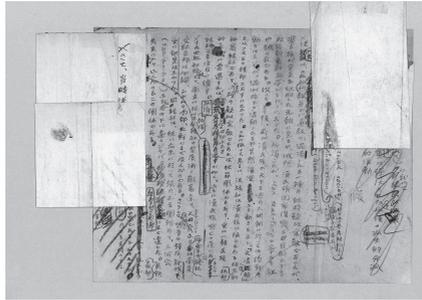
①左

《思ふに 当時の支那に於けるキリスト教勢力なるものに 到底》
 ——《即ち、その普^び辺に民衆の《嗜好》理解《程度》を考
 慮す に入れる》とするならば——到底《か 洪結社》を考
 慮す 力があつたとは思はれない。《首領》洪秀全は、洪結社
 の《思想》力なる支持の下に／立つたのである。

*用紙に黒鉛筆で記載。《①》「小活字」および一部の挿入指示に赤

鉛筆使用。《×》「湊」「假」および一部の取り消し線に青鉛筆使用。
画像番号 S2016102985_6_045 第一次整理番号 251

【三】



「海峡天地会」草稿【三】 成蹊大学図書館所蔵

※【一】【二】と同一の用紙、三枚。「用紙②」「用紙③」を上に向けて折りたたんだ下にある、「用紙①」の右下、左下部分。それぞれ「①右下」「①左下」とする。

【①右下】

㊦ の「史及び性質」《に就いて》

憲に彈圧された《る》以後の派生的分派的活動

《假》

〔Trad. society〕（目下他に参考材料なく、これに対し《適當な訳名なし》）

Association)

(Chee Hin Kongsai)

Tsing Fan
Ming Fun

【①左下】

一八五一年太平の乱となつ

背景であると云はれるが、

《思想》力なる支持の下に

《首領》

*用紙に黒鉛筆で記載。一部の挿入指示に赤鉛筆使用。《×》「假」および一部の取り消し線、傍線に青鉛筆使用。「Tsing Fan / Ming Fun」の取り消し線については疑問がある。全体として【一】「用紙①」への挿入と削除として処理したが、削除は青鉛筆により「Tsing Fan / Ming Fun」の部分になされている。「反清復明」の「復」のローマ字表記に「F」は入らないので、この部分の青鉛筆は採用記号の可能性もある。ただし、用紙①の覆いと黒鉛筆による別の削除指示により、最終的には削除されたと判断した。画像番号

S2016102985_6_046 第一次整理番号 251

【四】

《×》「ところで、いま、《↑張詰こと》《何》錫東がどうしてゐるか
 といふことは、僕も任務《↑上》、ちよつと云へないことなんす《↑
 《よ。》しかし《ですな》、もしもあなにこんなことをお／願ひした
 としたら《、どうでせう。》つまりあなは《それは》、あな《た》
 にあの何錫東を見てもらわす《ふ》。さうしてそれが、はたして真
 の何であるかどうかといふ《その辺の》《鑑別》が《》／
 あな《た》に《》《出来るだらうか、どうか、》《×》「《え
 え、》あの男のことなら、毛穴の数まで知つてゐますかゆね《をり
 ますよ。》と、《》《翠芳が》《》《去のである》《が投
 げつけ／るやうに、》《いふの》《である》。《だから》もし《》《
 あのをみたら、／いろ／＼なことを《が》憶ひだ《され》てく
 るでせう。たとへば《別の》、姿かたちまですつかり同《じ》な
 別《男であつた》《たにしろ》、しばらく私が見てゐたら、きつ
 と《》《観破するだらうと思ひます。》《×》「いづれ《は、そ
 》《さうして貰ふことが、》《実現するかもしれませぬ》《よ。》
 だからそれ／までは、何《》《の》《ゆ》《い》《ゆ》
 《のことについては、いっさい》《僕を追求しない／ください。》《
 小つて《翠芳のせがみかゆ》《やつと》《》《といつて、
 翠芳のせがみから《やつと》《》《通れでて》《》《一息》《

《》《だ》《》《しかし》《すると、》《》《》《》《》《いま
 《ひたむき》《》《から、またしても》《翠芳の》《そこへ
 また新らしく翠芳のことが胸をふさぎ、いまの、ひたむきさ、あの
 惨めさが考へられてくる。》《》《》《》《》《》
 《》《》《》《ま》《》《と同時に》《また》《》《まの氣の毒な花
 車について考へた。》《》《》《》《》《》《》
 《×》《いまや》《》《翠芳は、》《》《招き返しや》《》《の本》《落陽》
 《の》《み》《》《》《》《面してわあ》《のまへに立つてわあ》
 《に面してゐる。》。声はつぶれ《た。》《》《》《あの花旦》とし《
 》《た》《》《すの》《ての、》《代》《へのないものをうしなつ
 てた。》《》《》《さうしても》なほ、生きなが《永》らへ《て》
 ゆく《かねばならぬ》ことは翠芳の氣性を知るだけに、それは小暮
 にも察するにあまりあることだつた。ゆふべの／演技の、毒婦金蓮
 のあの精《》《細きはまる》《細きはまる》写真といふゆ《やつ》も、
 實際《まこと》は、翠芳が観衆へではなく《》《自分自身にむけ
 て演技してゐることは尙《、わかる》《》《のだ。それは》《いは》そ
 れは、《もう帰れぬ広東の舞／台への郷愁と》《絶望》《》《のなかで》
 《つゆも》日を／おく《つてゐる。》翠芳《氣の毒》《翠芳は》
 唯《心の》《權であ》《の》《》《このうへない》《》《唯
 無《慰め》《》《にちがひない。》／そこへ、《》《》《かれ
 》《葬》《つた何がこの町にゐると傳へた小暮の迂勝さは、》《充分》
 翠芳の《》《》《》《これから》《》《ついで》《責任を／もた》《ね
 ばならぬと考へられてくる。と、》《》《》《滅刃に》《煙草をやらぬ》、

翠芳のはうから、↓けむりが流れてくる。／□□は、□□□□□□□□《組んだ》腕をさすゆながらどじこ中々

*縦幅二五ミリの用紙に黒鉛筆で記載。《×》および一部の挿入指示に赤鉛筆使用。画像番号 S2016102985_8_246、第一次整理番号 192



昭和 17 年クアラルンプールにて
(前列海音寺潮五郎、後列左から小出英男、塚本罔男、小栗虫太郎)
かごしま近代文学館所蔵

【五】

《×》解剖の翌日、傳染病者の梁の死体□□《は》《が》茶毘にホ《附》されることになつたが、その寸前まで《は》飯沼□□《は》屍体室にこもつてゐる《た》。／小暮が、電話がまきので病陸そこから、電話がホカ《掛》つてきたので飛んでいつてみると、《暑さと》死臭ホカ《ホカ》《でむつとなるやうな》うす暗がりのなかに、飯沼の眼／□□《□□がギロツ／と》ひかつてゐる。かれは、《ものも云はず、》死体の右腕をあげ□□、

《×》「おい、みろ《□□》。」と、小暮にしめた。しかしそこには、鞭蟲をこらすチノソール注射のあとが、ぼつん／くとあの《條》痕□□のうへにあるだけだつた。／なんだ、これが——と、小暮が怪訝さうに顔をあげると、

《×》「注射の数が□□□□□□《ねえ、さしずめ君《の》小説》なら、もの□□言ふ注射——とでもいふのだらう。》。僕は、チノソール注射を二回しかしなかつたが、この腕には三つの痕がある。わかるかね。／しなかつた筈なのに、□□《の》注射の《痕》□□が《、なぜ》一つ尋いか。」といつて、□□右の死体□□石の死体《置》台のうへから一本の針をとりあげ、飯沼はそ／れを鼻に近附けた。□□《×》「こいつを□刺したんだ。しかし、表面注射のやうにみえるから、いつかうに分らな□□い。そしてこれは、サカイ／《族》の矢毒のイボーに・といふ、印度□□□□《にある》灌木の実汁をまぜた、瞬間死の猛毒だ。張君、張崎、いや梁の死は他殺なんだぜ。／□□には、□□

一九七〇・五）、この時の従軍体験を基に執筆されている。谷口基『戦前戦後異端文学論——奇想と反骨——』（新典社、二〇〇九・五）が指摘しているように、発表後の一九四三年四月—二月にかけて『青年』で連載された読物「馬來風物（南方風物・マライ風物）」に、本作のアイデアが見える。【一】【二】【三】における洪門会については「秘密結社『白旗会』」（一九四三年一月）で、次のように資料入手の経緯が述べられている。

シンガポール陥落の数日前のことである。私は、コーランポリーのフリー・メーション會館を搜索して、多量の押収品を得た。それには、入會式用の本ものの骸骨があり、金色燦然たる儀式用の装束類がありさうしてなほ、五百冊にもおよびフリー・メーション關係の書籍類を得た。で、そのなかに、私の注意をことさら惹いた三巻のものがあつた。それが題名を「洪門會」(フン、ツン、ゲイ、ウオード及びスターリング共著の限定出版のもの)といひ、かの漢民族の大秘密結社「天地會」のことを書いたものである。

また、【四】【五】に登場する李翠芳については実在する「広東の名女形」であることが「万年青」劇団（同九月）で触れられ【五】に登場するイポーの毒については「馬來の毒」（同四月）にその紹介がある。

終戦後に虫太郎が没したのち、本作は『海象に舌なきや 其他』

（木々高太郎監修、推理小説叢書第八卷、雄鷄社、一九四七年五月）に収録されたが、「海象に舌なきや」と改題され大幅な改稿が施されている。

今回の草稿において初出と大きく異なるのは、【一】の「用紙②」に書かれた部分である。これに該当する初出部分は以下の通りである。

さてここで、東洋のフリー・メーション結社とよばれるこの「天地會」について、もう少し説明を加へる必要があるやうに思はれる。また、この張帝とは一體いかなる人物かと云ふことについてもまだ讀者諸君はなにも知らされてないのである。そんなわけで、ここちよつと硬い記述が續くやうであるが、なにしろ、これが本篇の骨子のことゆゑ、しばらく御辛抱ねがひたい。

天地會は、他にさまざまの名稱をもつてゐる。洪門會とも、三點會三合會、三星會ともいはれるが、ではこの結社がいつ頃起つたかといふと、その邊は遺憾ながらわからない。天地會側の主張によれば、かの、劉備、關羽、張飛の桃園結義がそも／＼の始まりといふのだが、まづこれは、彼らの神話でしかないやうに思はれる。とにかく

草稿では「東洋のフリー・メーション結社と呼ばれる」「第一章 洪門會 (Hun society) に就いて」とあることから、初出では「一、

「洪花亭再建」後半に、緒形隊出發後に語り手が天地会を説明する文が、作品冒頭の第一章に構想されていたと考えられる。だが初出に「こちよつと硬い記述が續くやうであるが、なにしろ、これが本篇の骨子のことゆゑ、しばらく御辛抱ねがひたい」とあるように、小栗はこの箇所を説明的な「硬い記述」と感じていたようだ。冒頭に置くことを避けて、まず物語を駆動させ導入で読者を引き込んでから説明を挿入するという発想に至ったのではないだろうか。

他には、「最初↓さいしよ」「至るや↓いたるや」など漢字が仮名に多く修正され、「に於いては↓では」「が如く↓やうに」など文語的表現が平易な表現に修正されており、読みやすさへの配慮が窺える。そして、草稿では「天地會」の名称は一度のみ使われ、他は「洪門会」とされている。

漢字の字体は「菊芋」関係草稿と同様の処理をした。崩し字や俗字は以下のものがある。

漢(漢) 旗(旗) 象(衆) 赤(真) 派(派) 来(来) 腕(腕)

(はまだ・ゆうすけ 本学教授)

(すずき・ゆうさく 鹿児島大学特任助教)

(いがわ・おさむ 熊本学園大学講師)

(おおたか・りょうこ 博士(文学)・夢野久作研究)

(にしだ・きょうこ 本学大学院博士前期課程修了生)

(やぎはし・ゆうた)

立正大学付属立正中学・高等学校専任講師)